

■ 予告：国際シンポジウムの開催  
2010.12. 15-17

大学開設130周年の記念事業の一環として、都市研究プラザは12月15日(水)～17日(金)に「City, Culture and Society : Reinventing the City for Cultural Creativity and Social Inclusion」と題するシンポジウムを開催する。会場は大阪国際交流センター(大阪市天王寺区上本町)である。

本シンポジウムの目的は2つある。1つはグローバルCOE拠点に選定された都市研究プラザの社会・調査・研究活動の学術上の総括を社会に広く示すことであり、もう1つはその活動から生まれた学術雑誌『City, Culture and Society(CCS)』の将来を支える国際学会の基盤を整備するためである。

CCSは都市研究プラザが編集母体となりオランダの世界的学術出版社のエルゼビア社から本年度より刊行される。CCSは主に内部の研究者に発表機会を提供する大学の季報などとは性格が異なり、全世界の研究者に投稿機会が与えられ、学術上の刺激を与え、発展を促すものである。その仕組みが機能するためには、世界の有力研究者からの支援が欠かせないため、本シンポジウムの開催と同時に国際学会AUC(The Association for Urban Creativity)を設立することで体制の確立を目指す。この学会の設立によってCCSの基盤が盤石のものとなり、今後のプラザの活動の柱石となり得るであろう。

<シンポジウムの参加予定者>

- 特別講演  
ブルーノ・ラトゥール(パリ政治学院副院長)要請中
- 基調講演  
リリー・コン(シンガポール国立大学副学長)  
シャロン・ズーキン(ニューヨーク市立大学教授)
- 講演者  
アンドリュー・カービー(アリゾナ大学教授、Cities編集長)  
フランソワ・コルベール(HECモントリオール教授、AIMAC(The International Association of Arts and Cultural Management)設立者)  
アン・マークセン(ミネソタ大学教授)  
アンディ・プラット(ロンドン大学 キングスカレッジ教授)  
ルシアナ・ラツェレッチェ(フィレンツェ大学教授)  
パトリック・コアンデ(HECモントリオール客員教授、ストラスブール大学教授)

海外サブセンター関係者  
Elsevier関係者  
UNESCO関係者

<共催>  
財団法人 大阪国際交流センター

※なお、続報はWebやニューズレター等に掲載予定である。  
■堀口朋亨(都市研究プラザ特任講師)

イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページをご覧ください。

4/29	第7回 阿倍野Religion-Cafe どっぴり昭和町2010企画「まちかど昭和写真展」	第3ユニット
☒	… 阿倍野プラザ☒	
5/14	ホワイト・バランス ーある肖像	第2ユニット
☒	… 大阪市立大学☒	
5/22	ガムランエイド(震災文化復興支援)	第2ユニット
☒	… アートセンター☒	
5/26	第8回 阿倍野Religion-Cafe 街づくり宗教者シリーズ その1	第3ユニット
☒	… 阿倍野プラザ☒	
5/27	第3ユニット研究会&ハウジングイニシアチブ研究会	第3ユニット
☒	… 西成プラザ☒	
6/26	こりあんコミュニティ研究会研究大会・スタディツアー ~27	第3ユニット
☒	… 大阪市立大学他☒	
7/9	研究交流会「日韓におけるホームレス支援・研究:10年の省察と展望(仮)」	第3ユニット
☒	… ソウルサブセンター他☒	
7/23	メディア芸術フォーラム・イン・大阪(予定) ~25	第1ユニット
☒	… ACDCホール・クリエイティブセンター阿波座☒	

■特別研究員(若手)公募  
G-COE特別研究員(若手)募集(平成22年8月募集分) 2010年7月に公表を予定しています。  
情報⇒ <http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■URP-Newsletter 次号発行予定は、2010年8月です。

ニューズレター発行も7号となりました。今号からユニットレポート +1U +2U +3U +4U  
や現場プラザ短信の一部に上のようなマークがついています。これは、複数のユニットが領域を超え、共同で企画・開催したイベントであることを示すものです。グローバルCOE拠点に採択され4年目。「学際・複合・新領域」として、新たな取り組みが広がりがつつあることを物語っています。(由)

**URP** Osaka City University | Urban Research Plaza  
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

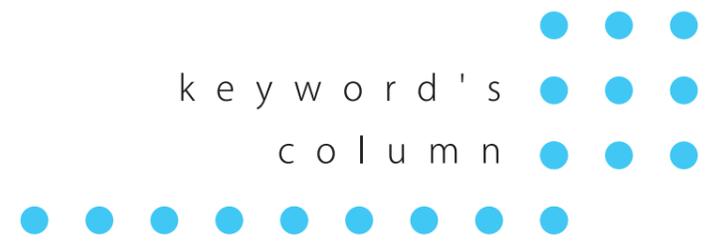
「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまで都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設(現場プラザ、海外サブセンター)を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel:06-6605-2071  
e-mail:office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野 浩 富田常雄  
ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 中川 眞 3U 水内俊雄 4U 岡野 浩  
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター 第7号 2010年5月  
編集委員会 佐藤由美、橋羽 愛  
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>



貧困と経営  
[Poverty and Management]

近年、経営学においても「貧困削減」の取り組みが議論されるようになってきた。所得別人口構成のピラミッドの底辺層を指すBOP(Base of the Pyramid)をめぐる、「1日2ドル以下で暮らす」BOPこそが重要な消費者であるという主張が論争を巻き起こした。すなわち、持続可能なビジネスの対象としてBOPを捉えようという主張である。また、トロント大学のStren教授らは経済的不平等、社会的包摂、文化的緊張等から脱却するものとして、市民社会の調和的な進化と両立する発展を目指す「社会的サステナビリティ」の重要性を説いた。

都市研究プラザでは「文化的な創造を媒介にした社会包摂・貧困削減の取り組みが都市を再生させるカギである」という理念のもと、市民との多様な「共創」活動の中から、理論と実務とを融合させる「知恵」を生み出してきた。さらに、私が進めるプロジェクトではこれらの概念を進化させるべく、「貧困削減のための経営管理システム」の構築を目指し、貧困向け製品開発管理の具体化としての価値工学(VE)や多数の組織にまたがる人事考課・業績管理手法であるバランススコアカード(BSC)の研究をミシガン大学やデルフト大学および企業と行っている。

岡野 浩(都市研究プラザ副所長/経営学研究科教授)

In recent years the alleviation of poverty has been discussed even in management science, such as the micro-financing of Mohammad Yunus' Grameen Bank. The late C. K. Prahalad of the Univ. of Michigan and Cornell's S. Hart have stirred up arguments over the assertion that the bottom layer of the income pyramid, those living on less than two dollars per day (BOP) are important customers. In other words, poverty alleviation is not charity but can be a sustainable business. The Univ. of Toronto's Polese and Stren have discussed the importance of 'social sustainability' in development in parallel with the evolution of civil society as a means for escaping economic inequality and cultural tension and achieving social inclusion.

At the Urban Research Plaza, based on the idea that grappling with social inclusion and poverty alleviation through the medium of cultural creativity is the key to urban revitalization, through various 'joint creation' activities with the worlds' citizens we have created 'know-how' that fuses theory with actual practice. The project I am working on aims to build a 'management system for poverty alleviation' to advance these concepts. I am engaged in research with the Univ. Of Michigan, Univ. of Delft, and some enterprises on value engineering (VE) for managing development of goods for the poor and on Balance Score Cards (BSC), a means of managing personnel and works across multiple organizations.

OKANO Hiroshi (Vice Director, Urban Research Plaza/Professor, Faculty of Business)

# 特集1 第1回 CCSカンファレンス in ミュンヘン

SPECIAL 1 The City, Culture, and Society (CCS) Conference in Munich

2010年2月25日(木)から2月27日(土)、都市研究プラザはミュンヘン大学日本センター(以下LMU)と共催で「Creating Cities: Culture, Space, and Sustainability」と題するカンファレンスを開催した(会場:IBZ、助成:国際交流基金、大阪市立大学、バイエルン州社会省、ミュンヘン大学協会、ミュンヘン大学機会均等官)。この契機は2年前に遡る。2008年3月、エヴァリン・シュルツ氏(LMU教授)と岡野浩(都市研究プラザ副所長)が国際ワークショップをミュンヘンで開催。その後も継続して意見交換を行い、また、ワークショップの記録をURPドキュメント7号として刊行するための協働作業を積み重ねてきた。そうした交流の成果の一つとして、本カンファレンスは開催されたのである。

主な目的は2つあって、(甲)グローバル化の進展によって都市にもたらされた様々な課題をどのように解決していくか、学際的議論の中からヒントを見出すこと、(乙)国際ジャーナル『City, Culture and Society (CCS)』のすぐれた書き手と論文の発掘、であった。

## ■創造都市論をめぐる白熱した議論

3日間にわたるプログラムには、18人の研究者が招聘され、約60人が参加者として世界各地から集まった。都市研究プラザからは佐々木雅幸所長、岡野浩副所長、堀口(特任講師)、川井田(特任講師)が参加し、佐々木と岡野は研究発表も行った。構成は、一人が発表した後に参加者全員で議論するというもので、積極的な質問が相次いだ。日本からは小林真理氏(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)と野田学氏(明治大学文学部教授)も参加。小林氏は「Have the Local Authorities Created the Creative City?」というテーマで、日本とドイツの70年代以降の文化政策の比較を行い、地方自治体の役割を論じた。野田氏は「Seen from a Distance」と題し、東京・渋谷が戦後の消費社会でどう変化してきたかを、2つの現代演劇を通じて分析した。

「創造都市」を正面から論じたのは、クラウス・クンツマン氏(ドルトムント大学名誉教授)と佐々木である。クンツマン氏はヨーロッパでいち早くcreative cityの概念を提起し、研究を重ねてきた。佐々木は80年代半ばから金沢市で経済界や市民と協働しながら政策提言を行い、その経験から日本で



カンファレンス会場の入口

最初に創造都市を紹介し、今も理論と実践を架橋している。カンファレンスでは「Networking and Cultural Diversity of Creative Cities」と題し、2004年からユネスコが創造都市ネットワークの構築を開始した背景として、文化多様性と社会的包摂との関連を論じた。クンツマン氏は「The Creative City Fever」というテーマで、創造都市は何をもって定義されるのか、もっとも創造的な都市はどこかなど刺激的な問いを次々と繰り返した。そして、「Creative City」は政策立案の際、あらゆる分野に適合する便利な言葉であるため、その都市の状況と乖離してしまっただけで「mayfly(カゲロウ)」に成りかねないが、「創造都市をめざすことは様々な分野の政策を統合し“creative governance(創造的統治)”を生み出す好機になる」「創造都市というパラダイムは金融危機から回復する希望になりえる」と述べた。両者に共通するのは、新自由主義的な解釈のもとでの創造都市論(高い創造性とスキルをもった人々を誘致して都市の活性化を図るなど)ではなく、それぞれの地域の実情を読み解き、社会的弱者と呼ばれる人々をエンパワメントして創造性を発揮できる環境や制度のあり方を重視している点である。

## ■Presenters & Chairman

- Sonja BEECK (Bauhaus Dessau, Germany)
- Brett CHRISTOPHERS (University of Uppsala, Sweden)
- Eveline DÜRR (LMU, Germany)
- Irene GÖTZ (LMU, Germany)
- H. Detlef KAMMEIER (Bangkok)
- Roger KEIL (York University, Toronto)
- Mari KOBAYASHI (Tokyo University)
- Klaus R. KUNZMANN (Potsdam, Germany)
- Ute LEHRER (York University, Toronto)
- Nicolas LEWIS (The University of Auckland)
- Ana ROSAS MANTECÓN (Universidad Autónoma Metropolitana, México)
- Manabu NODA (Meiji University)
- Glen NORCLIFFE (York University, Toronto)
- Hiroshi OKANO (URP, Osaka City University)
- Masayuki SASAKI (URP, Osaka City University)
- Evelyn SCHULZ (LMU, Germany)
- Lidewij TUMMERS (TU Delft, The Netherlands)
- Kôji UEDA (Japan Foundation, Cologne)
- Klaus VOLLMER (LMU, Germany)
- Franz WALDENBERGER (LMU, Germany)
- Paul WALEY (University of Leeds, UK)
- Gordon WINDER (LMU, Germany)
- Henry YEUNG (National University Singapore)

## ■CCSの射程と参加者の共感

CCS刊行の目的は、グローバル化がもたらした地球規模の問題に対して、新たなシステムを長期的展望のもとに都市論として全世界に提起することであり、CCSでは、コミュニティ、都市の再構築のための手段として文化(特にアート)的創造力に着目している。アートは境界を越えて人々を結ぶ力をもっており、格差や排除をなくそうとする人類の本質的希求に対して、社会包摂のための極めて有効な方策となり得る。したがって、CCSが確立を目指している新たな都市論とは「社会包摂型創造都市論」であり、CCSは次のような機能を果たすことで、都市論のさらなる進展を図る。

1. 「社会包摂型創造都市論」などの先端的都市論の彫琢のためのグローバルなプラットフォームの形成
2. 「文化創造を媒介にした社会包摂」を都市論の中心に置き、コミュニティに向き合ったアートマネジメントや都市文化政策、文化政策と福祉政策の融合、共助のシステムを内包した都市ガバナンスのあり方など、創造的都市空間の構築に向けた理論と政策課題の研究
3. 従来のような欧米起源の都市論(の受容)ではなく、開発主義と権威主義的行政から急速に変容しつつあるアジアの都市の分析に重点を置きながら、世界的な都市政策課題を明らかにする。

本カンファレンスはCCSのめざす射程に基づいて開催され、参加者はその志に大きな賛意を示した。3日間の議論で刊行の意義がさらに伝わり、多くの研究者が論文投稿を申し入れてくれた。これらの成果は、URPドキュメントやCCSの特集として近い将来公表する計画である。

## ■レセプションでの総領事からのメッセージ

26日の夜は、在ミュンヘン日本国総領事館で歓迎レセプションが開催された。小菅淳一氏(総領事)と鈴木康熙氏(副領事)らがあたたかく出迎えてくださり、なごやかな雰囲気のもと、参加者同士の交流も深まった。小菅氏は、ドイツにおける都市研究プラザの活動を独立行政法人理化学研究所(日本で唯一の自然科学の総合研究所)とマックス・プランク協会(ドイツを代表する学術研究機関)との提携と同レベルの重要な学術交流であると捉えてくださった。さらに小菅氏は、カンファレンスの継続開催とともに、都市研究プラザとLMUの提携関係のさらなる深化を望むとも述べられ、身の引き締まる思いであった。

- 川井田祥子(都市研究プラザ特任講師)
- 堀口 朋亨(都市研究プラザ特任講師)



レセプションにて(右が小菅総領事)



カンファレンス会場の風景

From February 25<sup>th</sup> (Thu.) through the 27<sup>th</sup> (Sat.), 2010, the Urban Research Plaza and the Japan Center of the Ludwig-Maximilians University (LMU) of Munich jointly held a conference titled "Creating Cities: Culture, Space, and Sustainability," at the International Center for Science and the Humanities (IBZ) in Munich. It was sponsored by the Japan Foundation, Osaka City University, State Ministry for Social Affairs of Bavaria, Münchener Universitätsgesellschaft, Equal Opportunities Officer of LMU Munich.

The main goals were: 1) from an interdisciplinary discussion, to spotlight hints for solving the various problems brought about by the ongoing progress of globalization in cities, and 2) to provide exposure for the excellent authors and articles of the international journal *City, Culture, and Society* (CCS).

18 researchers were invited to make presentations and approximately 60 people from around the world participated in the program which extended over three days. The participants expressed their support for the objective of the journal CCS, which is the affirmation of the idea of 'socially inclusive creative cities.' Through the three days of discussions, this intention was further clarified, and many researchers agreed to contribute articles to CCS. Publication of the results of the discussions, as URP documents and in a special issue of CCS, is planned for the near future.

There was also a reception held on the night of the 26<sup>th</sup> at the Japanese Consulate-General in Munich. Mr. Kosuge Junichi, the Consul General, said that the activities of the Urban Research Plaza in Germany were an important scholarly exchange, and expressed his hopes that the conference would continue to be held annually and that the relationships of collaboration would deepen further.

都市研究プラザは2007年にグローバルCOE拠点に選定され今年4年目となる。厳しい経済社会情勢のもと、貧困や排除問題が各地から報告され、我々の研究活動への社会的期待は高まっている。そこで、2009年度のプラザウィークはグローバルCOEのテーマ「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」そのもので設定した。具体的には、2010年1月18日(月)～22日(金)、現場プラザをベースにユニット横断的な研究交流活動「アクション・リサーチ」を「ドキュメンテーション」することによる、学知と実践知の「相互変容のプロセス」を共有できる「場」の設定を中心に据えた。

■日本橋一龍王宮―天神橋(1月18日)

初日は「大坂/大阪の歴史文化遺産と都市の周縁性」をテーマに、フィールドワーク(以下、F W)(回)間、そして座学の3部構成で行った。まず、F W(回)では、山下・藤井(G-COE特別研究員)、そして八木滋氏(大阪歴史博物館学芸員)の案内で、生國魂神社、旧長町、千日前周辺の順に各地区の歴史的痕跡を辿った。F W(回)では、済州島出身者の祈りの場とされる龍王宮で、本岡・宮下(G-COE特別研究員)から歴史的背景及び現状についての説明がなされた。そして、水内(都市研究プラザ副所長)による長柄周辺の説明を聞きながら大淀プラザまで移動した。座学では、近代における長柄・本庄地区の方面委員制度についてポーター(G-COE特別研究員)による報告が行われ、それを受けて水内と塚田(文学研究科教授)によるコメントと議論が行われた。



桜ノ宮龍王宮でフィールドワークする

■阿波座―西成(1月19日)

2日目は「起業と企業」をテーマに、2部構成で行われた。前半は、岡田(クリエイティブセンター阿波座研究補助スタッフ)より、「創造産業における起業と持続を促す都市環境」について報告が行われた。後半は西成区に移動し、水内の案内で木造住宅密集地区を回りながらF Wを行った。(株)ナイスの佐々木敏明氏・田岡秀朋氏による「くらし応援室」

や「楽塾」の活動紹介、そして長橋小学校では、若松(G-COE特別研究員)の案内で空き教室を活用した製靴塾の視察を行った。最後に、レストラン・ピアノで、様々な形で地元コミュニティに根付いた社会的企業を展開している(株)ナイスの富田一幸氏(代表取締役)から西成区の現状とコミュニティ企業の役割についての講演と、参加者の自由討論が行われた。



長橋小学校の空き教室を活用した製靴塾の取り組みを聞く

■豊崎―阿倍野(1月20日)

3日目は「生活文化・包摂」をテーマに行われた。豊崎プラザでは、改修済みの長屋と改修前の長屋を見学した。その後、黒木・川口・綱本(都市研究プラザ研究補助スタッフ)、葛西・平川(G-COE特別研究員)らをリーダーに、3つのチームに分かれ、豊崎・中崎町地区、阿倍野地区の住宅地を観察、写真撮影を行った。その後、佐藤(都市研究プラザ特任講師)の司会により、阿倍野プラザでプレゼンを行った。その内容は、専門領域を反映して多岐に渡り、プラザウィークがめざす「ユニット横断的な研究交流活動」の試みとして有意義であった。その他、阿倍野地区在住の郷土史家と長屋を改造し居住している建築家から報告があった。また、豊崎地区の歴史についても深田(G-COE特別研究員)より報告があった。いずれも、現場プラザにおける「市民知とのふれあい」を実体験する機会となった。



長屋が残るまちかどで魅力を発掘する

■カマメ―船場―大淀(1月21日)

4日目は「アートと社会包摂」をテーマに、現場プラザ3ヶ所をめぐる企画であった。初めにカマン!メディアセンター(カマメ)にて、企画者である上田假奈代(都市研究プラザ研究補助スタッフ/NPO法人こえとことばとこころの部屋)と原田麻以氏(カマメ)より、たちあげからの活動の様子、実践が報告された。次に船場アートカフェでは、高岡(都市研究プラザ特任講師)と嘉名(工学研究科准教授)より、「船場建築祭」「まちのコモンズ」等のとりくみが紹介された。地域社会で大学が働くことの意味、またアートが社会を媒介する作用について、映像も交えて分かりやすく提示された。最後に大淀プラザでは、音響とダンスによるパフォーマンスが披露された。参加者たちをも巻き込むダンサーの身体表現に、身体も頭もほぐされる時間となった。その後、議論が行われ、いつになく芸術の本質にかかわる自由な言葉が発せられた。



カマン!メディアセンター(カマメ)の活動に学ぶ

■@高原記念館・ワークショップ

最終日は高原記念館にてパネルディスカッションが行われた。開始前に、佐々木雅幸所長より期間中活躍した研究員への表彰と、プラザウィークのドキュメンテーション上映が行われた。続いて、現場プラザで活動している研究員(西成:蓬萊、阿倍野:黒木、船場:高岡、豊崎:深田、大淀:堀江)によるプレゼンテーションにより論点が惹起され、それを受けてパネルディスカッションでは活発な討議が繰り広げられた。パネルディスカッションでは北川(G-COE特別研究員)が新たに参加し、これまでの発表を論評するという形式で議論の口火が切られた。これに対して各発表者が各現場プラザからの視点と個人的見解を述べ、活発な議論へと発展した。また、福本(G-COE特別研究員)は、北川が呈示した概念である“social involvement”の学問的可能性について力説した。

■まとめ

午後のF Wと夜の座学、そしてそれに続く懇親会を通じた活発な議論の場の設定と各現場プラザをふんだんに使いこなしながら行ったユニット横断的な交流は、今回のプラザウィークにおける最も大きな特徴と言えよう。さらに加えると、アウトプットのみを想定せずに、それぞれの研究領域を横断することで生じるシナジーをプロセスに落とししていく、実験の道場としての「プロセス・ドキュメンテーション」という新たな実践的手法論の意義を確認できたことも大きな成果の一つとしてあげられよう。今回のプラザウィークでは、現代都市が抱えている新たな問題(社会的排除)に対抗し、このような試みを行うひとつの実験場を設けるという意図もあった。今後はこのような「新たな関係形成を導くプロセスを構築する場」の含意をどう活かしていくかが課題である。

■全泓奎(都市研究プラザ准教授)

本岡拓哉(都市研究プラザ特別研究員)

辻堅太郎(所長アシスタント・R A)

佐藤由美・櫻田和也・堀口朋亨(都市研究プラザ特任講師)

The theme that was decided on in planning for this year's Plaza Week was the G-COE theme itself, "Reinventing the City for Cultural Creativity and Social Inclusion." Specifically, utilizing the field plazas and based on the results up until now, through 'documentation' of the 'action research' activities across all the units, it focused on establishing a 'place' or venue for sharing the 'mutually transforming process' of academic knowledge and practical wisdom. On the first day, following the theme of "Osaka's Historical and Cultural Legacy and Urban Marginality," walking tours and study sessions were held in the Nipponbashi area, Ryuoukyu, and the Nagara area, and time was set aside for considering urban marginality. On the second day, taking the theme of "Entrepreneurship and Social Enterprise," we walked to the Creative Center Awaza and Nishinari inner city area, and there time was allotted for interacting with people actively engaged in various forms of social enterprise that have taken root in the district. On the third day, with the theme "Living environment and Inclusion," from the Toyosaki Plaza we walked through Toyosaki, Nakasaki-cho, and Abeno districts, observing the neighborhoods, and finished with a workshop at the Abeno Plaza. On the fourth day, with the theme of "The Arts and Social Inclusion," we held exchanges with people active at the Kaman! Media Center(KAMAME), the Senba Art Cafe and the Oyodo Plaza. On the final day, a panel discussion was held at the Takahara Hall. The outstanding feature of this year's Plaza Week was that exchanges were conducted across all the units, fully taking advantage of each of the field plazas. The work for the future is how to effectively include this idea of "venues for constructing a process that leads to the formation of new relationships."

1U

## 国際シンポジウム「都市の歴史的形成と文化創造力」とURP G-COE Intl.Colloquium

International Symposium “Historical Formation of Cities and Cultural Creativity” and the URP G-COE Intl. Colloquium **+3U**

2010年1月、国際シンポジウム「都市の歴史的形成と文化創造力」に都市研究の第一人者であるサスキア・サッセン氏(コロンビア大学教授)を招き、基調講演を委ねるとともに、URP G-COE International Colloquiumとして、世界経済と都市の貧困問題についてインタビューを行った。

### ■国際シンポジウム「都市の歴史的形成と文化創造力」

2010年1月9日(土)・10日(日)、文学研究科都市文化研究センター主催・都市研究プラザの共催で、大阪市立大学学術情報総合センターと高原記念館で行われた。このシンポジウムは、文学研究科の重点研究「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」の一環として開催された。ここでは、都市文化を三つの歴史的段階-形成と変容の段階(16～17世紀)、成熟の段階(17～19世紀半ば)、グローバル化の段階(19世紀～現在)に分け、学際的な研究領域から多様な議論を紹介する狙いのもと、三段階に対応した「中世都市文化の形成と変容」、「近世都市文化の成熟」、「グローバル化と現代都市」のセッションが行われた。

また9日には基調講演が行われた。金児暁嗣学長による開会挨拶と井上徹(文学研究科教授)による趣旨説明、吉澤誠一郎氏(東京大学准教授)「中国近代都市の社会変容と文化再造」、吉田伸之氏(東京大学教授)「『文化創造力』と伝統都市」、サスキア・サッセン氏「危機の時代のグローバル・シティー金融から社会問題へ」の講演があった。

講演者のひとりであるサッセン氏は、グローバリゼーションによる資本と人口の世界的移動に着目してきた都市研究の第一人者であり、講演では、都市間ネットワークの増大による都市機能の分化、世界の多極化を具体的なデータを提示しながら解説した。その上で、都市固有の歴史性から形づくられる知識産業の重要性を指摘した。さらに、アメリカのサブプライムローン問題に端を発した、2008年以降の世界同時不況についても触れた。この問題の要は、金融会社がサブプライムローンを一括して銀行や海外投資家へ販売し、ローン借受人の信用価値とは関連無く商品化するため、低所得層がグローバルな金融システムに組み込まれる点にあるという。今後、住宅ローン債務率の低いアジア新興国や発展途上国で、第2第3のサブプライム問題が起きる可能性があるという警鐘を鳴らし、現代のグローバリゼーションと都市の社会的な不平等、貧困問題との関わりを改めて認識させた。

■八木寛之(前G-COE特別研究員)☒

### ■URP G-COE International Colloquium 「グローバル都市とホームレス問題」サスキア・サッセン氏へのインタビュー

1月10日(日)、都市研究プラザから14名が参加し、前日の基調講演に続き、サッセン氏への標題にもとづくインタビューを行った。3つのレベルからホームレスとグローバル都市との関係が紹介され、エスノグラフィ的な視点から観察するレベルと、貧困現象も著しいグローバル都市のレベル、そして、グローバルサウスやサブサハラといった世界スケールでの排除の問題として考えることを提唱された。

次にホームレスが、1980年代以降、都市問題として政治化され、世界の各地でそのタームの意味するところが広がったこと、そしてそれは経済システムの変動と関連して考えるべきであることを強調された。

こうしたホームレス問題は政治的なものとして取り組み、常に戦略的に位置付けてゆく必要があるとしめくくった。午後からは、大阪のインナーエリアの同和地区、寄せ場、在日コリアン集住地区を研究員らの案内のスタディツアーに参加された。なお、インタビューの詳しい内容は、「ホームレスと社会」2号(2010年4月)に掲載されている。

■水内俊雄(都市研究プラザ副所長)



インタビュー水内(左)とサッセン氏

On January 9<sup>th</sup> (Sat.) and 10<sup>th</sup> (Sun.) of 2010, an international symposium titled “Historical Formation of Cities and Cultural Creativity” was held jointly by the Urban Culture Research Center of Osaka City University's Graduate School of Literature and Human Sciences and by the Urban Research Plaza. In the keynote address on the 9<sup>th</sup>, Professor Saskia Sassen of Columbia University spoke about the enlargement of networks between cities through globalization and problems related to the worldwide recession that began in 2008. Then, on the 10<sup>th</sup>, an International Colloquium was held in the form of an interview with Prof. Sassen on the theme of “Global Cities and the Homeless Problem.” The audience was impressed by the fact that she posed the homeless problem as a political problem, and stressed the necessity to always lay it out strategically as an outstanding political issue for cities.

## 豊崎プラザ

大阪らしい長屋と路地の再生実験

現場プラザ短信1

### 豊崎居住者へのヒアリング調査

2009年6月から学生らが中心となり、豊崎プラザの居住者に対するヒアリング調査を実施している。この研究は耐震改修と住生活の向上の検証、長屋における居住文化の再評価等を目的としており、ヒアリング調査では、改修長屋への新・旧居住者の評価、各居住者の住まい方や改装の履歴、長屋居住者の変遷や入居の理由、豊崎地区の歴史などを聞いた。その結果、新しく入居した若い居住者は、季節や地域のふれあいを感じながら、長屋住まいを積極的に楽しんでおり、昔からの居住者も若い居住者を歓迎していた。また、戦前からメリヤス関連の家内工業に携わる住戸が多くあって、近隣の協力や結束につながっていることなどが分かった。さらに、改修が進んでいた長屋の原型がほぼ明らかになった。間取りや暮らしなど、プライバシーに関わる調査に快く応じていただいた。このことは、3年間の活動を通じて築いてきた信頼関係の成果として意義深いものがある。

本年2月の卒論発表をもって調査は一つの区切りをみたが、長屋建設当初の居住者まで追跡することができなかった。今後は、更に周辺地域への聞き込みなどを行い、内容の補完と拡充を継続していきたいと考えている。

■綱本 琴(豊崎プラザ研究補助スタッフ)



学生による長屋居住者へのヒアリング風景

## 和泉プラザ

「地域の歴史的総合調査」の取り組み

現場プラザ短信2

### 2009年度 和泉市合同調査報告書

和泉プラザでは、昨年の和泉市合同調査(2009年9月28日(日)～30日(水)、調査対象地:和泉市納花町、参加者計53名)の報告書を、実行委員長藤井正太(G-COE特別研究員)・久角健二(和泉プラザ研究補助スタッフ)を中心とした実行委員会で作成した。昨年は、納花にある二つの水利組合や山の用益の歴史的展開を調査の主軸として、1980年代以降における谷山池周辺の山への産廃処理業者進出に対する地元町会の反対運動と和解、リサイクル公園建設までを位置付け、地域の「歴史的現在」の様相を見通すことができた。

このほか、2009年度後期の文学研究科大学院考古学ゼミ(担当・岸本直文)における、谷山池周辺の開発と水利に関する研究成果、日本史講読(担当・塚田孝)の授業における、納花町・森医院所蔵史料の近世の土地売買・質入関係史料を分析した成果も、あわせて合同調査の報告書とした。

これらは2010年5月刊行の『市大日本史』13号に掲載される予定である。

大阪市立大学日本史研究室と和泉市教育委員会が、毎年夏に実施する和泉市合同調査を、主要な活動として位置づけています。毎年、和泉市内の1つの町会を対象に、地域の歴史を多様な方法から総合的に調査し、地元住民とともに地域の生活構築の歴史を学んでいます。



当日の史料調査の風景

■久角健二(和泉プラザ研究補助スタッフ)

## クリエイティブセンター阿波座

クリエイティブな都市型産業の連携推進と政策研究の拠点

現場プラザ短信3

### クリエイティブ・ミーティング at 阿波座 01



ミーティングの風景

2月1日から新プラザの「クリエイティブセンター阿波座(CCA)」が、活動を開始しました。北は福島から南は堀江、北加賀屋・南港まで連なる、大阪の西のクリエイティブ集積軸の中心部に位置する、クリエイターのオフィスを集めたACDCビル(2010年1月にオープン)にあり、大阪における都市型産業としてのクリエイティブ産業のリアルタイムな発展を研究し、支援するセンターとして活動を開始しています。

2月10日(水)に最初のイベントとして「クリエイティブ・ミーティング at 阿波座01」を開催しました。ACDCビルのプロデューサーでありクリエイティブディレクターのヤマモトヒロユキ氏、若手を中心に国際水準のデザインを大阪で展開することを目指すDESIGNEAST実行委員会、そして、四半世紀にわたり世界のクリエイティブ社会を追い続けてきた武邑光裕氏(札幌市立大学教授)を招き、「10年代OSAKA創造クラスターの可能性」をテーマに、約70人の参加者とともに、「民間としてのクリエイター主導で、世界のクリエイティブと結び付けることで大阪を活性化」(ヤマモト氏)、「大阪を意識せず世界水準で仕事をできる環境をつくる」(DESIGNEAST)、「若いクリエイターの独創的な創造力を世界規模で競わせる環境をつくることで社会が創造的に再生する」(武邑氏)といった経験など、様々な情報提供をもとに議論を深めました。

■岡田智博(クリエイティブセンター阿波座研究補助スタッフ)

2U 第8回 アカデミックフォーラム「To Solve Social Problem Through Art and Cultural Activities」  
The 8<sup>th</sup> Academic Forum in Yogyakarta +3U

アカデミックフォーラムは、都市研究プラザジョクジャカルタ・サブセンターにより、2003年からインドネシア国立芸術大学(ISI)及び、国立総合大学であるガジャマダ大学(UGM)との合同で、毎年継続的に開催されている国際フォーラムである。2010年3月17日(水)、ガジャマダ大学にて、「芸術、文化活動を通しての社会問題解決」と題する第8回の国際フォーラムが開催された。ここでは、3つのセッションに分かれ、インドネシアと日本から計10人の発表と質疑応答・議論が行われた。

セッション1では、主に、カンブン(Kampung)をテーマとした4つの発表があった。建築学的観点からより良いカンブン作りや、カンブン内での格差などの問題解決に対する提案(Ilya Maharika氏:インドネシア・イスラム大学)、また、村をモデルとした持続可能な都市コミュニティづくりのためのスペースの使い方の提案(M.Sani Roychansyah氏:UGM)、インドネシアの都市部での急速な発展に対して、もっとスマートな発展の仕方としてのスローライフの提唱(Djaka Marwasta氏:UGM)、河川環境の問題に関して市民団体のネットワークがどのように非政治的に地域住民とかかわってきたかの発表(高崎章裕:

G-COE特別研究員)等、ローカルコミュニティに深く関係するトピックについて議論された。

セッション2では、貧しい人々の社会包摂や社会の統合(川野英二氏:京都大学)、文化や芸術、創造性を通じた仕事の創出(Wiwik Sri Wulandari氏:ISI)、コミュニティの結束(Wisma Nugraha Christianto R.氏:UGM)について、具体的な例とともに話し合われた。

セッション3では、メディアによるイメージ作りを通じた消費の理解(Kurniawan Saputro氏:ISI)、芸術活動による障害者のエンパワーメント(Setiadi氏:UGM)、宗教などを通じたホームレス支援(Geerhardt Kornatowski:G-COE特別研究員)、そしてそれぞれの問題点などについて発表が行われた。

参加者は主に招待された人文・社会科学、建築・都市計画等を専門とする研究者約50人で、熱心に発表を聞き、質問する人も多く、議論の時間が足りないと思えるほどであった。文化や芸術を通してのコミュニティや都市の再創造、問題解決、社会包摂に関して、充実した発表、議論の行われたフォーラムであった。

■岡戸香里(G-COE特別研究員)

The Yogyakarta sub-center presented the 8<sup>th</sup> Annual International Academic Forum at Gadjarda University on March 17<sup>th</sup> (Wed). The theme for this year's forum was "To Solve Social Problem Through Art and Cultural Activities," and their were presentations by a total of 10 researchers from Indonesia and Japan. About 50 specialized researchers participated, and many questions were asked in this forum that consisted of substantial presentations and discussions related to community and urban re-creation, problem solving, and social inclusion through culture and the arts.



セッションごとの発表者と司会が前に並んで行われた発表風景

船場アートカフェ 芸術によるコミュニティ再構築

芸術がもつ「接合/媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

monthly art cafe

船場アートカフェでは、2010年2月1日(月)~28日(日)の1ヶ月間、「monthly art cafe」を開催しました。船場アートカフェのメンバーを中心として、多彩なテーマでレクチャーやトークショー、ワークショップなどを日替わりで行い、延べ300人が来場しました。

昨年に引き続き2回目となる今回は、大阪市立大学の学生による「学生企画」も新たに登場しました。これは、学生に対するアートマネジメントの教育および実践の一環として実施されたものであり、教員のサポートのもと企画から運営までのすべてを学生が手がけました。最も来場者の多かったプログラムは、学生企画のひとつである「釜凹バンドLive!」(2月17日(水))です。釜ヶ崎の日常を歌う「釜凹バンド」のメンバーによるライブとトークを中心に、ビジネス街の船場に釜ヶ崎の「生」の音が響きました。30人を超える来場者の中には仕事帰りの会社員や日雇労働者、音楽を志す若者など、さまざまなひとが入り交じり、熱気あふれる場を共有しました。今後も船場アートカフェでは、アートを媒介として人と人のつながりを生む活動を展開していきます。

■石川 優(船場アートカフェRA)



「釜凹バンドLive!」の様子

4U CULTURAL CITIES  
Creativity and Social Inclusion  
in Osaka and Copenhagen +2U +3U

2010年2月9日(火)~11日(木)、寒波で冷え込むコペンハーゲンで国際セミナーCultural Cities: Creativity and Social Inclusion in Osaka and Copenhagenが、国際交流基金の助成を受けて開催され、都市研究プラザから中川真(兼任研究員/文学研究科教授)、水内俊雄(都市研究プラザ教授)、櫻田和也(都市研究プラザ特任講師)の3名が参加した。

コペンハーゲン大学芸術文化研究科では、Marianne Ping Huan氏(学科長・教授)をはじめ、企画者のGunhild Borggreen氏(准教授)、Jacob Kreutzfeldt(都市研究プラザ特別研究員)は力のこもったプログラムを用意された。

「創造性と社会包摂」をテーマとした本セミナーは、初日、エクスカーションから始まり、Carlsberg財団のアカデミー、労働者階級の居住地域から中央駅裏手へと至る街路の中央緑地帯を再生した事例、薬物依存やホームレス支援にアーティストが入り、コミュニケーションの改善をもたらした事例などを歩き、体感した。



中央駅裏のホームレスドロップインセンター

続く両日は大学に会場を移し、口頭発表とディスカッションを行った。都市研究プラザからは、水内が西成区における社会的起業の事例、櫻田がホームレス問題に取り組むメディア実践例、中川が障害者とのガムランの事例について都市研究プラザの協働を紹介し、コペンハーゲン大学からは都市のプランニング、青空市場・歴史的広場の再生、都市の光や音の景観などについて報告があった。最後にBorggreen氏から「都市研究の方法論としての映像」の提起をもって締めくくられた。とりわけ創造的なサブ・カルチャー日常生活との交錯する自転車文化についての研究からは、大学と市自転車局との冊子づくりの協働、調査手法としての映像についておおいに議論が盛り上がった。翌日にはCCSに関するミーティングを行い、今後の展望にも大きな可能性を感じさせる成果がえられた。

■櫻田和也(都市研究プラザ特任講師)

From February 9<sup>th</sup>(Tue.) through the 11<sup>th</sup>(Thu.), an international seminar on "Cultural Cities: Creativity and Social Inclusion in Osaka and Copenhagen" was held at the University of Copenhagen. On the first day a study tour was held, learning from social inclusion and the practice of the arts, and on the following two days time was set aside for presentations and discussion on the topic of "Creativity and Social Inclusion." On the final day we were able to discuss the prospects active participation in the journal CCS.

海外サブセンター便り  
from Bangkok  
URP Bangkok sub-center +2U

バンコク・サブセンター

Over the past seven years, the Bangkok Sub-center has been able to celebrate our warm winter with research fellows from Osaka City University who have come to Bangkok with their research results in hand to present at our annual academic forum. In 2010, the 8<sup>th</sup> Academic Forum on "Empowering Urban Culture and Creativity: Art, PublicITY, and Transformation" was very special for many reasons. First, we extended a warm welcome to approximately 200 participants from North America, Europe, and Asia. Second, this forum provided an important venue for examining the directions of the developing cultural network in both public and private sectors. Third, the forum included the former Mayor of Bangkok, and a current advisor to Thailand's Prime Minister, Mr. Apirak Kosayodhin, as our keynote speaker. His speech helped broaden the audience's perspective of Bangkok as a creative city since the government has transformed this idea into a key concept in order to provide an economic catalyst to better urban living conditions and quality of life. As a member of the URP, we continue to extend our projects into the direction of social inclusion issues and empowering urban culture through arts in various parts of Bangkok.

■Pornprapit Phoasavadi, Ph.D.  
Deputy Dean for Research and Graduate Studies



チュラロンコン大学学生の発表でのパフォーマンス

バンコク・サブセンターでは、過去7年に渡り、研究成果を携えてバンコクを訪れる大阪市立大学の研究者の方々とともに、毎年冬季にアカデミック・フォーラムを開催してきた。今年度の第8回アカデミック・フォーラム「都市文化や創造力をエンパワーする:アート、PublicITY、及び変容」はいろいろな意味で特別であった。まず、欧米やアジアから約200人の参加があり、官民両セクターで成長する文化ネットワークの方向を検討する重要な機会となった。基調講演は元バンコク市長で現タイ王国首相アドバイザーのApirak Kosayodhin氏により行われた。その講演内容によれば、より良い都市生活環境やクオリティ・オブ・ライフのための経済的触媒を提供するキーコンセプトとして、政府はバンコク市に「創造都市論」を導入するとのことである。URPのメンバーの一員として、我々はバンコク各地の社会包摂の課題やアートを通じた都市文化のエンパワーメントなどの事業に継続的に取り組む。

Dr. ポーンプラピット・ポアサワディ(博士)  
副研究科長(大学院担当)

## 3U 第10回日独地理学会議 「格差拡大時代における新たな文化景観の形成」

The 10th Japanese-German Geographical Conference: "Making New Cultural Landscapes in the Era of Growing Disparities"

2010年3月21日(日)から25日(木)にかけて都市研究プラザの後援のもと、第10回日独地理学会議を行った。第1回は1969年にドイツで行った歴史を有する日独地理学会議は、各回、両国の地理学者がドイツあるいは日本でシンポジウムと巡検を開催してきた。今回は「格差拡大時代における新たな文化景観の形成」と題して、大阪市立大学高原記念館にてシンポジウムを3日間、和歌山県新宮市、太地町などの巡検を3日間行った。

### ■シンポジウム

3月21日(日)～23日(火)のシンポジウムでは、日本(大阪市立大学、大分大学、神戸大学、金沢大学、広島大学、立正大学、九州大学)とドイツ(ドイツ日本研究所、ボッフム大学、ミュンヘン大学)から、合計9名の研究者が都市や地方における格差拡大問題について発表し、各課題について議論を深めた。4つのセッション「農山村の振興」、「社会的弱者のコミュニティへの包摂」、「変容する都市居住地に関する市街地の改善」、「工業地区の衰退と再生」では、各課題と問題意識に関して、多様な意見が交換された。

### ■Program

3月22日(月)

**Session 1:** 9:30～11:30 Promotion of Rural and Mountainous Regions:Chair: Nakagawa S. (Kobe Univ.) / Elis V. (German Institute for Japanese Studies) / Kamiya H. (Kanazawa Univ.)

**Session 2:** 13:00～15:45 Inclusion of the Social Disadvantaged to Communities:Chair: Mizuuchi T. (Osaka City Univ.) / Yui Y. (Hiroshima Univ.) / Kornatowski G. (Osaka City Univ.) / Obinger J.(Munich Univ., URP Research Fellow)

**Session 3:** 16:15～18:15 Redress of Built-up Areas Associated with Changing Urban Habitation: Chair: OBA S.(Osaka City Univ.) / Lützel R.(German Institute for Japanese Studies) / Ito T. (Rissho Univ.)

3月23日(火)

**Session 4:** 9:30～11:30 Revitalization of Declined Industrial Areas :Chair: Miyamachi Y. (Oita Univ.) / Hohn U. (Bochum Univ.) / Yamamoto K. (Kyushu Univ.)

### ■巡検

23日(火)、和歌山へ向い、熊野比丘尼に熊野三山の絵解きを受け、世界遺産となっている熊野信仰について学んだ。24日(水)は旧熊野川町の限界集落を見学し、旧町役場建物にてその社会的諸問題について説明を受けた。かつて盛んであった林業については筏師から川の利用や作業な

どの話を聞いた。午後は新宮市へ移動し、隣保館を中心としたまちづくり、若者の就労対策や学校と連携した子供の見守り等の事業とその課題や取り組みについて説明を受けた。また、新宮市における社会的諸問題について稲田七海(G-COE特別研究員)が発表した。隣保館を訪問し、水内俊雄(都市研究プラザ教授)が同和住宅地形成の背景を説明した。25日(木)ドイツ側の希望もあり太地町へ向かい、くじら博物館にてかつての捕鯨様式について、学芸員から博物館の展示や捕鯨史の説明を受けた。さらに、「古式捕鯨狼煙場跡」や「鯨供養碑」も訪れた。

### ■評価

日独地理学会議の5日間では、地方都市や過疎地域特有の社会問題を、それぞれの専門的見地から議論を深めることができ、高齢化や人口過疎問題が地域にどのような影響をもたらすのかが明確になった。また、巡検を通じて、どのような対策が求められているかが明らかになった。今後、大都市だけではなく、地方における社会的課題にも目を向け、さらなる社会的包摂理論を探究していくことが必要であると感じた。

■ヒュラルド・コルナトウスキ(G-COE特別研究員)



新宮市の隣保館・児童館での白熱した議論

From March 21<sup>st</sup>(Sun.) through the 25<sup>th</sup>(Thu.), the URP sponsored and co-organized the 10<sup>th</sup> Japanese-German Geographical Conference. First organized in Bochum in 1969, the conference this time was held in Osaka and Wakayama. With the theme of "Making New Cultural Landscapes in an Era of Growing Disparities: Comparative Studies between Japan and Germany," there were 3 days of symposium and 3 days for a field trip to Wakayama Prefecture. Overall, this proved to be a great opportunity to learn more about the actual social conditions in regional areas and to use this experience to develop a more comprehensive approach to urban research and social inclusion.

## 西成プラザ

生活困難支援の老舗西成での実践を世界発信

現場プラザ短信の

### OCA! シンポジウム アートの力を信じる。 +2U

釜ヶ崎でカフェと「カマン! メディアセンター」を運営し、活動しているアートNPOココルームとの協働の成果として、2010年1月23日(土)に「OCA! シンポジウム アートの力を信じる。～釜ヶ崎での取り組みを事例に、地域とアート、社会とアートのかかわりをさぐる。そして、世界とであいなおす」というシンポジウムを浪速区のヒューマインドで開催した。

詩人の谷川俊太郎氏は釜ヶ崎を歩き、「路上」という詩作品をうみだした。また、ニューヨークからはスカイプを通して小沢健二氏(音楽家)による「アートという罫」について話がなされた。ここでは、権力にとって都合良くアートが社会包摂という言葉に包含されないよう注意深く呼びかけられ、アートの本質をさぐる内容となった。またイギリスからは、「ストリートワイズ・オペラ」のマット・ピーコック氏が登場し、昨夏、プリティッシュ・カウシル協力のワークショップに参加し、ミニオペラを作成した生活保護受給者の紙芝居劇「むすび」との音声による再会を果たした。参加者は300名、出演者やスタッフは80名ほどで、8時間半の長丁場にも関わらず、会場は集中力を失うことはなかった。会場後方の「おっちゃんカフェ」からはコーヒーや焼きおにぎりのにおいが漂い、あたたかい時間がながれた。 ■上田假奈代(都市研究プラザ研究補助スタッフ)



トークセッションで伸びをする会場風景

## 大淀プラザ

ホームレス支援から地域のネットワーク/人材の創造

現場プラザ短信の

### ホームレス現象の観測所としての大淀プラザ — 新年度の企画 —

大淀プラザは今年度、単身高齢者の暮らしについて考えることを企画しています。

高齢単身世帯の増加は全国でも顕著であり、2005年の387万世帯(高齢世帯の28.5%)から、2030年には約2倍(同37.7%)になることが予測され(国立社会保障・人口問題研究所)、高齢期の住生活の充実が課題となっています。



「脱衣所」で行われた研究会

大淀プラザが関わっている大淀寮(生活保護施設)の退所者は、多くが単身高齢者で地域交流が希薄です。退所者で作るOB会(会員約230名)の一部会員は施設に定期的に来所し、施設職員との交流はありますが、地域との関わりは密接とはいえ、またそのような交流の場も十分ではありません。一方、大淀プラザ周辺にも高齢者が多く居住しており、単身高齢者の生活という点では、共通の課題をもっています。

このようなことから、大淀プラザでは、2010年4月21日(水)、地域の人々も集まることができるような座談会を企画しました。これは、地域に住む高齢者の生活実態把握も目的とした企画であり、集う人々が生活の問題を語れるような会となりました。 ■堀江尚子(大淀プラザ研究補助スタッフ)、葛西リサ(G-COE特別研究員)

## 阿倍野プラザ

近代長屋を活用した居住福祉支援の試み

現場プラザ短信の

### 「長屋が繋ぐもの ～ヒト・ジカン・デキゴト～」

2010年1月20日(水)、阿倍野区で設計活動をされている望月芳恵氏による長屋の改修と暮らしについての講演が行われました。

【暮らしの記憶】改修のため、壁などを剥がしていく中で、子供の落書きや、素人仕事の改修跡など、従前の住み手の記憶を発見する体験をしたそうです。また、トイレの便器は、以前住んでいた老人が、足腰の悪い奥さんのためにセルフビルドで洋式に替えたもので、便器の前の壁に「good morning」と書かれた鶏の絵のタイルが貼ってあるそうです。おそらく、このタイルは、毎朝、奥さんがトイレを使った際に、少しでも元気になってもらえるよう貼られたもので、面識のない老人の人柄が忍ばれ、とても感動したそうです。改修を通して、従前の住人の暮らしが伝わってくるという興味深いお話でした。

【長屋コミュニティ】長屋の屋根裏は一続きに繋がっています。ある日、屋根裏のネズミの姿を見なくなり、その数日後、一番端のお宅に移動していたそうです。そこで、長屋の住民が協力してネズミ対策を行い、無事にネズミの駆除ができたとか。また、壁一枚で隣と繋がっているのも、お隣の生活の気配がよく分かり、夕飯時のお福分けや、休日の外出のお誘いもよくされるそうです。長屋住まいは、多様なコミュニティが形成されやすい居住形態だといえます。

長屋はヒトやジカン、デキゴトを繋ぎ、多様な関係性を生み出し、暮らしを豊かにする住まいであること、そしてそこでの「ゆるやかに繋がる暮らし方」は大阪の居住文化そのものであることを感じさせられた講演でした。 ■黒木宏一(G-COE特別研究員)